



平成27年度水稻生育診断予測事業速報No. 1

(早植栽培5月25日調査結果)

平成27年5月29日

栃木県農政部経営技術課

 **平年より莖数が多い。充実した莖を確保するため、早め（6月第1半旬）に間断かん水に入る。**
 **イネ縞葉枯病の発生量が多いと予想されているので、防除を徹底する。**

1 気象概況《4月上旬～5月中旬（宇都宮）》

4月上旬の平均気温は平年より0.3℃低かったが、中旬以降は平年よりも高く経過し、特に5月中旬は3.4℃高くなった。日照時間は、4月上中旬は平年より短く推移した（平年比：4月上旬41%、中旬73%）が、4月下旬以降は平年比140～146%と長く経過した。4月の降水量は平年比80%とやや少なかったが、4月下旬の県内ダム貯水量が平年並に確保されていたことなどから、移植は平年並に行われた。一部地域で代かきの遅れが散見された。

2 調査結果《早植栽培、品種：コシヒカリ》

(1) 16か所平均（表1-1～2）

ア 苗調査

苗草丈は平年比106%と長く、乾物重も重く（平年比111%）、葉齢は平年より0.2葉多く、苗の生育はやや進んでいた。

イ 本田における生育調査

草丈は長く（平年比113%）、莖数は多く（122%）、葉齢は0.3葉多く、葉色は平年並（-0.1）。生育診断値（葉色×莖数）は平年比117%と大きい。

(2) 分施肥体系の生育（10か所）（表1-1～2、2-1～2）

ア 草丈は28.3cmで平年比114%と長く、莖数は167本/m²で平年比119%と多い。

イ 葉齢は5.6葉で平年より0.3葉多く、葉色は4.1で平年並。

ウ 葉色×莖数値は701で平年比113%と大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主莖第2節分けつが15.0%（平年51.6%）、主莖第3節分けつは97.5%（平年22.3%）で、主莖第2節の分けつ発生率は平年よりも低い、主莖第3節の分けつ発生率は平年よりかなり高い。また、葉面積は0.16m²/m²で平年比

146%と大きく、乾物重も14.6g/m²で平年比178%と重い。【農試調査】

(3) 全量基肥体系の生育（6か所）（表1-1~2、2-1~2）

ア 草丈は28.4cmで平年比110%と長く、茎数は155本/m²で平年比133%と多い。

イ 葉齢は5.7で平年並より0.4葉多く、葉色は3.8で平年より0.1淡い。

ウ 葉色×茎数値は595で平年比129%と大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は3か所で確認され、防除を実施していないため発生程度はやや高い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが2.5%（平年36.3%）、主茎第3節分けつは75.0%（平年18.5%）で、主茎第2節の分けつ発生率は平年よりも低い、主茎第3節の分けつ発生率は平年よりかなり高い。また、葉面積は0.14m²/m²で平年比170%と大きく、乾物重も13.1g/m²で平年比184%と重い。【農試調査】

3 技術対策

育苗期間中の気温が平年よりも高く、日照時間も長く経過したことから、やや生育が進み充実した苗となった。

移植後、特に5月中下旬の気温は県全域で2~3.7℃程度高くなり、日照時間も平年比130~160%程度と長くなった。これにより、水温・地温が上昇して順調に活着し、分けつの発生が促進された。分けつ発生位置は5月10~12日の低温により主茎第2節分けつが抑制されたと考えられるが、分施、全量基肥ともに茎数が平年より多く確保できている。また、葉齢から判断すると、生育は平年より1~2日程度進んでいると推定される。

気象庁地球環境・海洋部発表（27年5月21日）の「関東甲信地方 1か月予報」（5月23日~6月22日の天候見通し）では“気温は平年並~高く、降水量は平年並~少なく、日照時間は平年並~多い”と好天が予想されている。今後、葉色×茎数値を適正範囲に維持するためには、やや生育を抑えることが必要と考えられることから、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

目標とする茎数（穂数）360~380本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数30千~32千粒/10a）を確保するまでは、夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温の上昇を図り、分けつ発生を促進する。

目標茎数が確保でき次第、間断かん水に入る。平年の間断かん水開始時期は6月第2半旬であるが、今年は葉齢展開がやや早く、分けつの発生が順調なことから、平年よりも開始時期を早め、6月第1半旬には間断かん水に入る。なお、茎数が平年より少ないほ場では夜間かん水、日中止水（浅水）を継続して分けつを促進するが、必要

茎数が確保でき次第間断かん水に入る。

白未熟粒の発生を防止するとともに、登熟度を高めて良質米を生産するためには、適正籾数を確保することが重要である。初期の茎数が多く、過繁茂気味の生育になると籾数過剰となり、食味、品質の低下を招く恐れがある。適正籾数確保には間断かん水に入る時期が重要となるので、遅れないようにする。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センター発表（27年5月22日）の「平成27年度 病害虫発生予報第2号」では、イネ縞葉枯病の発生量はやや多いと予想されている。

発生が多い地域では、ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用して、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用+本田での薬剤散布）を実施する。

イ イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ

イネミズゾウムシの発生が目立つほ場（移植後2週間の水田における成虫密度が株当たり0.5頭以上が要防除水準）では、有効な薬剤により防除を行う。

多雨で湿度の高い日が続くとイネドロオイムシの幼虫発生期間が長引き、多発生になりやすいことから、今後の天候と発生状況に十分注意する。

ウ いもち病（葉いもち）

取り置き苗はいもち病の発生源となるため、早めに処分する。

(3) 雑草防除

中期除草剤の散布は、使用時期に注意して散布する（移植後30日までのものが多いので、ラベルを十分確認）。なお、MCPB等を含む除草剤は低温、シメトリンを含む除草剤は高温で薬害が発生しやすいので注意する。

除草剤散布時の水管理は、散布直前に水深4～5cmとし、散布後7日間は落水や、かけ流しをしないよう注意する。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>)

(4) 天候不順への備え

気象庁地球環境・海洋部発表（27年5月12日）の「エルニーニョ監視速報（No. 272）」では、“エルニーニョ現象が発生していると見られ、秋にかけて続く可能性が高い”と予想されている。エルニーニョ現象が発生すると、西太平洋熱帯域の海面水温が低下、積乱雲の活動が不活発となり、日本付近では、夏季は太平洋高気圧の張り出しが弱くなり、低温、多雨、寡照となる傾向がある（近年では、平成14年、21年、26年に発生）。

天候不順に対応できるよう、以下の点に留意しながら準備を進めておく。

ア 深水管理が可能な畦畔

稲が低温に弱い時期は、幼穂形成期（出穂前25日頃、早植コシヒカリで7月上旬）～減数分裂期（出穂前14～7日頃、早植コシヒカリで7月中～下旬）である。特に、減数分裂期に最低気温が17℃を下回ると不稔が発生し、減収の危険性が高まる。さらに、幼穂形成期、減数分裂期の両時期に低温に遭遇すると被害が助長される。

対策としては、幼穂形成期から減数分裂期にかけて深水管理を行い、水の保温効果により幼穂を低温から保護することが基本である。そのためには、畦畔を深水管理が可能な状態にしておく必要がある。

イ いもち病の防除

天候不順時は、稲の軟弱生育といもち病の発病好適条件が重なり、減収の危険性が高まる。

間断かん水により稲体の窒素濃度を下げて稲体を硬くし、抵抗性を高めるとともに、初発時期（6月第4半旬～第6半旬）には場をよく見回り、早期発見・早期防除に努める。

ウ 加里の追肥

加里は、デンプンの生成、同化産物の移行、根の活性化に重要な働きをする。

天候不順時は稲体の窒素濃度が高くなりやすく、拮抗作用で加里の吸収は抑制されるため、追肥により積極的に加里濃度を高める必要がある。特に、分けつ盛期以降は、加里濃度が低くなるので、出穂前40～45日頃に積極的に加里を追肥する。

4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

高齢農業者の事故が増加しています！以下のことを心がけましょう。



- ・こまめな休息や健康診断の受診等、疲労回復と健康管理を徹底する
- ・ヘルメットや安全靴等、事故に備えた服装をする
- ・複数人での作業を基本とし、やむを得ず一人の場合は携帯電話を持つ

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！

7月21日に、農薬危害防止研修会を開催します（13:30～とちぎ福祉プラザにて）
お申込み・お問い合わせは、栃木県農政部経営技術課 電話 028-623-2286